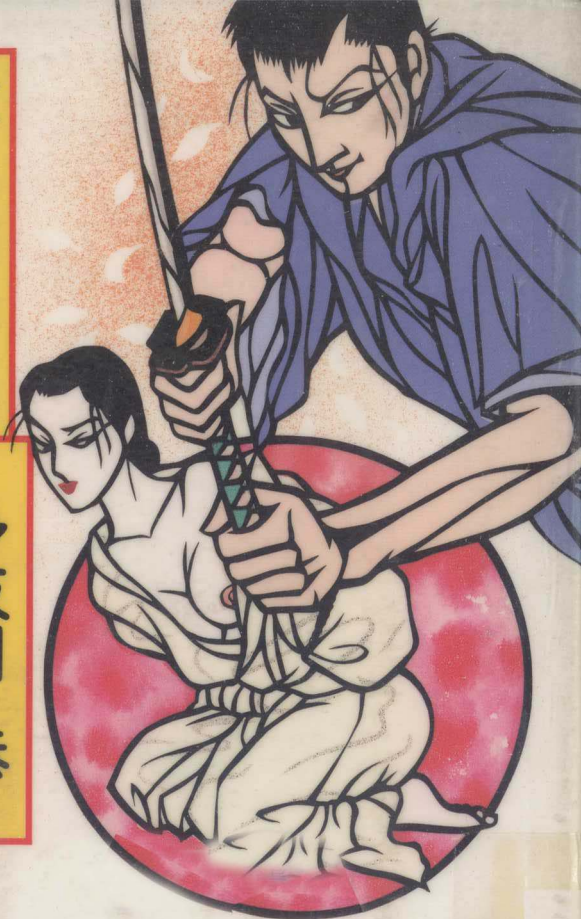


片手斬り同心

首打人左源太事件帖

多岐川 恭



徳間文庫

徳間文庫



帖事件太源左人打首
かたてぎ どうしん
片手斬り同心

© Miyoko Matsuo 1996

1996年3月15日 初刷

著者 多岐川 恭

発行者 徳間 康快

発行所 東京都港区東新橋一丁目一〇五
株式会社 徳間書店

電話(〇三)三五七三・〇一一(大代)
振替 〇〇一四〇一〇一四四三九二

印刷 凸版印刷株式会社
製本

編集担当 永田勝久

ISBN4-19-890478-2 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

帖事件太源左人打首

目次

第一話	小塚原 こづかつぼら のさらし首	5
第二話	おれに似た浪人	55
第三話	金貸しのお常	105
第四話	泣きぼくろの女	153
第五話	片手斬り同心	203
第六話	空白の旅路	251
解説	石井富士弥	301

第一話 小塚原こづかつぼらのさらし首

1

潮地左源太は獄門首を眺めていた。獄門台は地上三尺。その上に固定された首は、やや上向きになり、目を開いていた。頸部けいぶはほとんど無いように見え、切断面を塞ふさいで塗り固めた赤土のすぐ上に、顎あごがある。

顔は不精髭ぶしょうひげに覆われ、皮膚は青白い。長い牢幕ろうぐらしで陽焼ひやけがあせたのか、もともと色白だったのか、わからない。髪は一応整えてあるが、月代さかやきは伸びている。

「いい男じゃないかねえ、もったいない」
「おや、もったいないとき」

数人の女連れが、ささやき合い、辺りをはばかった笑いが起こった。

「どうせ、さんぎ女を泣かせたやつさ。それにしたって、首だけで、まるで生きているようだねえ」

見物人はほかにもいる。怖々と、遠くから及び腰で見ている者、獄門台のつい側まできて、熱心にと見こう見みしている者、罪状をしるした捨札を読む者。

左源太も捨札を読んだ。浅草聖天町の大工で名は美代吉、二十五歳、仲間の弥之助と語らい、花川戸町の袋物屋宮戸屋の総領息子で当年八歳の由松を路上でかどわかし、大川沿い、今戸町の空家にかくした上、身代金五百両をよこせと、宮戸屋に投げ文した。

かどわかしの三日後の夜半、大川橋の中央で、金と由松の身柄の受け渡しが行われ、宮戸屋からは、あるじの仙右衛門と番頭小兵衛が出向いた。一方、美代吉と弥之助は子供を連れてきていた。

五百両を弥之助が受け取り、子供の手を握っていた美代吉が、その背を押して前へ突き飛ばし、同時に両名は逃げ出しかけたが、あらかじめ橋の両側に身をひそめていた捕方が走り寄ってきた。金を持った弥之助は、とっさに大川に飛び込み、そのまま行方をくらしました。

美代吉は泳ぎが不得手で、飛び込むことができず、かぎした匕首を叩き落されて、呆気なく縄を掛けられた。

連れてこられた子供は由松ではなく、駄賃に釣られた飴売りの息子であった。由松は空家で殺され、その床下に埋められていた。

「美代吉って野郎に違えねえのかな。他人の空似かもわからねえが、おれにはどうも、こいつが豊次ってやつに思えて仕方がねえ。豊次は昔、ちよいと知っていた男だ。まさか人違えってことはあるめえが」

「おい、滅多なことを言うもんじゃねえ」

「そいつはわかつているが……もつとも豊次は、大それた山の踏めるやつじゃなかった。死顔だから人相が變つて、そう見えるのかもわからねえな」

「てつきりそうだぜ。厭だ厭だ。怖いもの見たさで来てみたが、やっぱりいい心持のものじゃねえや。行こう行こう」

「大工だと書いてあるんだ。豊次は大工なんぞじゃなかった」

「まだ言っていやがる。だからこいつは美代吉という悪党よ。このまんま帰るのは寢覚めが悪い。一杯やって、景気をつけようじゃねえか。小塚原じゃあ気が利かねえ。橋を渡って千住に繰込もうぜ」

柄の悪い職人とも、遊び人とも取れる四、五人が、そんな話をしていたが、みなそそくさと刑場に背を向けて歩きだし、通りへ出ると北へ足を速めて消えた。歩いて程なく小塚原町で、飯盛女を抱えた遊所がある。それは千住大橋の手前に当り、橋を渡ると千住の宿になる。先は水戸街道である。

暮色が漂いはじめている。秋の日暮れは早い。獄門首の見物人もまばらになった。

獄門首は鱗雲の高く浮かんだ空を眺めているようだ。陰の工合で、笑っているようにも見える。

広い刑場内には番人小屋、高さ一丈の石地藏、馬頭観世音の石像、南無妙法蓮華經の題目を刻した石碑があり、花が上げられ、香煙が漂っているが、荒涼の趣きはまぬかれない。

刑場外の四方はすべて田畑、原野であり、人家は見当らない。強い風が左源太の裾をまくり上げ、砂ぼこりを巻き上げて行く。みるみる暮色は濃くなり、獄門首も石像も黒い影になった。見物人も散ってしまった。左源太は急がぬ足取りで刑場を出た。

町の明りは、昼をあざむくとも言いが、暗く寂しい刑場から町に入ると、軒行灯、提灯が一きわ明るくにぎやかに見えるのは確かだ。

遊女屋が道をはさんで立ち並んでいる。本来は旅籠のはずだが、格子の向うに女が見世を張り、廊と同じ造りである。ただ建物が小ぶりで粗末なと、女の品が、身なりその他、吉原などに比べれば下っているのが、一目瞭然というだけのことだ。

だが、町はほどほどににぎわってはいる。橋北の千住同様、水戸をはじめ諸大名の参勤の荷や、近在の物資が着くところだ。

左源太は一旦遊女町を通り過ぎ、大橋にかかり、その中程まで来て、橋桁にもたれて休んだ。川風が頭の中まで吹き入り、吹き抜けて行くようだ。脚下に黒く沈んだ大川の流れは、音もない。空には月一片。下流、浅草辺りの上が、ぼんやりと明るい。

茫々^{ぼうぼう}として、何を考えることもない。

左源太はまた引き返した。

その女は若松屋という店の格子内にいた。女は二人で、一人は十八、九ほどの年であろう。このほうは厚化粧の顔が派手やかで、活発に嫖客^{ひょうかく}に声を掛けていた。いま一人は二十四、五歳の年増^{としま}風で、髪も着物もあまり飾り気がなく、端のほうに横坐^{よこすわ}りになり、客を呼ぶ様子も見せていなかった。薄化粧の顔は悪くないが、色気や愛嬌^{あいきょう}を欠いている。投げやりといった風情がある。

左源太が年増風の女にひかれたのは、その目のせいであつた。格子に寄つて行つても、女ははじめそっぽを向いていたが、うるさそうに上げた目が左源太のと合つた時、なにかキラリとした。どちらも視線をそらさず、しばらく見合つていたが、女の唇が笑いに似た陰を作つた。

「お武家さん、お上がりな」

と円味を帯びた低い声で言つた。

左源太はうなずいた。

やり手の案内で二階に上り、手狭な一室に通された。女の持ち部屋らしく、襖^{ふすま}をへだてた隣りが、朋輩^{ほうばい}の女の部屋になつてゐるようだ。壁は煤^{すす}けてひびが入り、雨の染みらしいものも見える。畳は古く、半間床には色のあせた七福神の軸がさがっている。塗りの剝^はげかかった簞笥^{たんす}が一棹^{さお}、鏡台、乱れ箱、袖屏風^{そでびやうぶ}。粗末な夜具一式が隅に積み重ねてあり、砂を噛^かむような部

屋だ。

若い者が膳部ぜんぶと酒を運んできた。左源太は膳のものには手を付けず、酒だけを独酌で飲みだした。

女がゆっくり入ってきて、無言のまま前に坐り、珍しいけどものでも見るように、左源太に目を据えた。愛嬌皆無と言っても、不機嫌なのではない。行灯の安油が匂い、灯芯とうしんが音を立てる。

「お前はあまり商売熱心ではなさそうだな」

と左源太は言った。女はそれには答えず、

「吉原や深川に飽きて、いかもの食いにかい？ それにしても、よくわたしの客になったものだね。どこがよくてだい？」

と聞いた。

「お前の目を見て、気が合いそうだと思った。ほれたとは言わぬが」

「わたしも同じことだよ」

女の目がちょっとだけ優しくなった。やはり目が美しく生きて、なにか並みでない。顔はよく見れば難がなく、鼻筋も上品に通っていた。唇は小さめだが、形はいい。難癖をつけるとすれば、ほんの少し顎が張っているところか。だが、気になるほどではなく、むしろ顔全体の締りになっている。

「お泊りかい？」

「いや、帰る」

「どこへ？」

「橋場だ。花屋の二階に住んでいる」

「二本差しだと、仕置場も怖くないのかねえ。人魂ひとだまが飛んで、狐きつねが出るよ。野良犬に喰いつかれるよ」

「野良犬か。こっちも野良犬だから、怖くはない。さっき、獄門首を見てきたところだ」

「そう言えば、きょうからさらしてあるのだってね。物好きナ」

「どうでもいいが、お前の物言いは乱暴だな。里言葉は使わぬのか」

「人は使うよ。吉原言葉のまがいのをさ。わたしは使わない。ばかばかしい……お客さんの名前は？」

「潮地左源太。潮の満ち引きの潮で」

「古風な名前だね。左源太とは」

「源氏の大將のようだと言った女がいる」

「どんな女だい？」

「賊だったがね。みごとな女だった。押込みにしくじって、真冬の大川に飛び込んで、行き方知れずだ。死んでいようよ」

「わたしはふくという名で出ているけれど、潮地さんには本名を教えてあげよう。さわというのさ。親きょうだいも亭主も、いろもなしさ。潮地さんも独り身だろう？」

「よくわかるな」

「なんとなくさ。世渡りは何をして？」

左源太は苦笑した。

「こればかりはわかるまい」

「わからない。なにか剣呑けんおんなことだろうけれど」

「そこまではわかるのか」

初会しよかいの女におのれの生計なつきの手段を教えるなど、さわでなければ決してしなかったろう。さわにはどこか、心を許していいようなところがある。

「頼まれて、罪人の首を落すのが商売だ。一首十両でな。諸国へ旅をしては、首を斬きってきたよ」

2

「それは聞いたことがあるよ。お前さんがそうだとはいびつくりだ」
と、おさわは言っとうなずいたが、驚きの色は別に見られない。

「だれに聞いた」

「たしかお客にさ。どの客だっけね」

おさわは、はぐらかすような笑いを見せた。

「血なまぐさい男は厭か」

「選り好みなしさ。ここは揚げ代四百文の安女郎が巢食っているとところだから……と言っても、わたしだけは六百文。高けりゃあおやめよ」

「どうしてお前だけが六百文だ？」

「少ないお客で、けっこう稼ぐからさ。六百文なら悪い客はつかなくって、楽もできるだろう？　けれども、一首十兩はいい値段だね。一兩でも高いよ。よく頼みにくるやつがいるねえ」

「首斬り役が仕事を厭がる。そういうわけありの罪人が、けっこういるものだ」

「首を五つ落せば五十兩。遊んで暮せるじゃないか」

「そうは運ばん。この仕事は、次から次とはゆかんからな。ことに、こうして江戸で不精を極めていればなおさらだ」

「いま、あぶれているのかい？」

「その通り」

おさわは思い出したように酌をしてくれるだけで、酒は飲まなかった。

おさわが手を叩くと、さきほどの若い者が上がってきて膳を引き、手早く夜具をのべて行つた。

「泊ってお行きよ。夜更けの寂しいところをテクテク帰ったって、だれが待っているわけでもあるまいし」

そう言いながら、おさわは先に寝た左源太の横にすべり入ってきた。

「膝小僧を抱いて寝るより、おさわさんの餅肌もちはだにあったためられて寝るほうがマシだろうに」

「餅肌か。なるほど、餅肌だ。たるみもない。どれ、よく見せろ」

左源太は夜着を剥ぎ、おさわの身に付けたものを、すべて取った。おさわはあらがわず、足を締め気味にし、胸を抱くようにして、目を閉じていた。手触りで思った通り、沈んだ艶のある美しい体で、手先足先は繊細である。

「田舎とは縁のない女のような。場違いという気もするが……」

左源太はつぶやきながら、裸のおさわの上に再び夜着を掛け、抱き寄せた。

「ごつごつして、骨っぽい体だね。それに、酒が入っているくせに、手足が冷たいよ。お前さん、薄情なたちだね」

左源太は刑場の前を通り過ぎた。どこも静まり返り、番人小屋から乏しい灯あかりが洩もれているばかりだ。空は曇り、傾いた月をかくして、辺りは塗りこめた闇やみになっている。野良犬の呼び交す声が、遠くでしていたが、左源太ははじめ気にしなかった。

だが、歩いていると、犬の吠ほえる声は近くなり、前方に移ってきた。一匹ではなく、声は激しくなった。

女の弱い悲鳴が聞こえたようだった。耳を澄ますと、それに違いなかった。女が犬に襲われたと見える。しかし、今時分、こんな場所を女が歩いているものか。

とにかく左源太は足を早めた。やがて、女が路上にうずくまっているのが、ぼんやり見えてきた。四肢を縮め、丸くなって犬の攻撃を防いでいるようだ。すでに、どこかを噛まれているかもしれない。左源太は走りだした。

大きな犬が二匹、女に吠えかけていた。犬が飛びかかろうとするたびに、女は腕を振り回し、また丸くなる。絶えず切れ切れの悲鳴を上げていた。女は何かを後生大事にかかえ込んでいるように見える。

左源太は駆け寄りながら抜刀し、刀の嶺^{みね}で犬の一匹の首筋を叩き据えた。その犬は尾を引いた悲鳴を上げると、よろめきながら逃げ出した。残る一匹が齒をむき出してうなり、前屈^{まえかがみ}みの姿勢から跳躍してきたが、身を沈めながら横に払うと、嶺は前肢の付け根に当たり、あばらが折れたはずだった。

犬は横ざまに転がってのたうったが、ようやく起き上がり、これも長い泣き声をたてながら闇に消えた。

女は背を丸めてうずくまった姿のままだった。血の匂いが左源太の鼻を打った。

「噛まれたな。傷を見せなさい」

と左源太は言った。

驚きと恐怖で動けないようだ。左源太の言葉も上の空^{うわ}で、全身を震わせ、しきりにしゃくり上げていた。

女は右足首、右腕、左肩先を噛まれていた。